

復興をめざす現地をサイクロンが直撃

日本が総選挙で沸いていた 12 月 13 日、サイクロン・エヴァンが南大洋州を襲った。それから一週間、日本の政権交代が決定的となった頃、サモアでは死亡者 5 名、行方不明者 12 名、被害総額約 110 億円という大被害をもたらされていた。2009 年の大津波からの復興をめざしてきた南海岸は、エヴァンの上陸とともに竜巻に見舞われ、多くの家屋が跡形もなく倒壊した。首都では氾濫した河川が大人の胸まで達する濁流となり、8 月に現地で私たちを歓迎して下さった看護学部の教員 2 名の集落を根こそぎ流してしまった。

被災地への救援物資支援の難しさ

現地の新聞社によるネットニュースでは、保健省はただちに被災者に対する健康チェックを開始し、今後は食糧や飲料水、衣類、寝具、安全で衛生的な環境、持病を抱えた人々の医療ケア、感染や事故の防止対策、心理的サポートなどが必要だと報じている。熱帯のサモアでは温度湿度共に高い時期を迎え、水害後の感染症の蔓延が懸念される。サモアは絶海の孤島である。医療スタッフは足りているのだろうか？避難所での予防接種プログラムは即刻開始されただろうか？

被災後 1 週間以内にサモアを支援する複数の国際機関による支援会議が招集され、日本政府もテントやポリタンクなど 1,000 万円相当の緊急援助を決定した。しかし、海外からの支援物資が被災者の手に届くのはいつだろう。現地の看護教員らは、避難所となったナースホールで 300 名ほどの被災した女性や子どもに健康管理の活動をしており、特に車いすが不足しているため寄贈を求めているという。その要請に応える手段を探してみるが、輸送費の高額さや混乱した現地の様子を考えると、車いす一つ提供することさえ容易ではないことに改めて気づかされる。

経験から得られた知見を今こそ看護に

現地では被災後 1 週間たっても電気や水道が復旧せず、数千人もの被災者が国立病院や地方の診療所に密集したため、政府は「最寄りの教会などへの避難を勧める」と呼びかけている。しかし、被災直後に人々がめざしたのはやはり医療機関だった。津波被災の直後、遮るものもない病院の廊下や床にご遺体や茫然とした被災者があふれた報道写真の記憶と、悲しみと不安に暮れる人々のケアに再び奔走する看護師らの姿が浮かび上がる。

私たちがサモアを訪ねたとき、各地で避難進路を示す看板を見かけるようになった。しか

し、地区毎の避難場所の指定、物資の備蓄、交通手段の確保、医療人員の配置など、津波の経験は今回のサイクロン被害への備えにどの程度活かされただろうか。教員や現地の看護師に、災害看護の協同的な取り組みをしようと呼びかけながらも、具体的な方策に踏みこめないうちの自身の気概のなさを痛感する。被災経験から得た知見を共有し、看護を通じて人々の命を守る使命を発揮するための行動力が今こそ求められている。



写真のキャプション：随所で見かけるようになった避難表示